

ラヴィルマルケとリユーゼル（七）

—いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について—

梁川英俊

X 『ド・ラヴィルマルケ氏の「バルザズ・ブレイス」の歌の真正性について』

ブルターニュ民謡とは何か

では、その小冊子のなかでリユーゼルは具体的にどのようなことを書いていたのか。ここで『ド・ラヴィルマルケ氏の「バルザズ・ブレイス」の歌の真正性について』の内容を簡単に辿ってみることにしよう。

まずはこの小冊子の構成から見よう。先述したように、この小冊子には本論の前に「前書き」が付されている。そこでは冒頭に、すでに引いたサン・ブリューの会議の前にリユーゼルがラヴィルマルケに宛てた手紙の全文が掲載され、この会議における詳細も含めて、著者がこの小冊子を出版するに至った経緯が紹介されていた。続く本論はローマ数字で番号を付された二つの部分に分かれる。以下、その最初の部分から概観しよう。

著者はまずブルターニュの歌の歴史を古代ガリアまで遡って説き起こす。そこではつねに『バルザズ・ブレイス』の「序文」が意識され、ときにそれとは相反する主張が展開される。たとえば、リユーゼルはまずブルターニュの詩人の祖先は

古のバルドであるとしながらも、ラヴィルマルケのように話をケルト圏全域にまで拡張しようとはせず、その範囲をあくまでもガリアに限定しようとする。著者はさまざまな文献を引いてその昔日の栄光を語り、バルド全盛期の六世紀に活躍したアナイリン、ヒヤワツヘン、タリエシン、メルランの名を挙げつつ、しかしこう付け加えるのを忘れない。「しかしわれわれはガリアの外には出ないでおこう。それはわれわれの限界を超えるだろう⁽¹⁾」。

実際、ここで著者がしきりに強調するのは、ケルト圏におけるガリアの特殊性である。そこではバルドの地位がかなり早くに低下し、しかもローマの侵略によってその歴史が早々と途絶えてしまったため、資料にも乏しい。それゆえ、ことこの問題に関しては、彼らの足跡を十五世紀まで辿り得るアイルランドやウェールズとガリアを同列に論じることはいないのである。リユーゼルは『バルザズ・ブレイス』の「序文」の冒頭に掲げられていた「もしガリアのどこかにドルイドの伝統を継ぐ詩人がいたとすれば、それはアルモリカ以外にあり得なかつたろう」というアンペールの言葉を引きながらも、しかしラヴィルマルケとは対照的に、たとえ今日まで伝承されているものがあるとしても、わずかの諺や俚諺か詩句の断片にすぎなからうと述べる。そのうえで彼の考察は、ラヴィルマルケがその成立が五世紀に遡るとした『グエンフランの予言』へと向かう。

この詩に関して著者はまず、一七五二年に出版されたルペルティエ師の『ブルトン語辞典』に触れる。その「序文」のなかでタイヤンディエ師は、「ルペルティエ師が見つけた最も古い手稿は一四五〇年の手稿で、グイングラフ Gwinglaff という名の自称予言者の予言集である」と書き、ルペルティエ師自身も当の辞典のなかでこの予言者の詩を二行引用した。また、グレゴワール・ド・ロストルナン神父も、ランデヴェエネックの僧院でルペルティエ師がこの手稿を所持していたことを確認している。にもかかわらず、リユーゼルはその詩句がこの予言者が生きていた四五〇年まで遡るかは疑わしいと言う。

なぜか。理由はおもに二つある。まずそうした詩が、ラヴィルマルケの収集した歌と同様、その時代の言葉で書かれていないこと。いまひとつは、この予言者がトレギエ地方に住んでいたとされるのに、現在この土地の民間伝承のなかにその痕跡が何も残っていないことである。たしかに、ラヴィルマルケはその歌集のなかで、グエンフランはロストルナンが生きていた十八世紀はもちろん、いまでもブルターニュでは有名であると述べていた。しかし、この地方に生まれ、そのあらゆる種類の伝承を研究した者として、リユーゼルはその記憶はもはや民衆のなかにはまったく見当たらないと断言する。「似たような名前を聞いたことがあったが、それも一、二回である。たとえば、メネ・オムの麓のルアルガットで、ある老婆がこの山の頂にはかつてワルフラン *Warc'han* がいた、と話してくれたことがあった。(……) 彼女はそれが人間なのか動物なのかも分からなかった⁽²⁾」。

もちろん、著者はその種の名前をもつ予言者が五世紀にいて、その歌や詩が口頭伝承によって現代にまで伝えられたという可能性まで否定するわけではない。実際、グエンフランのものとされる諺や俚諺は、ペンゲルンのコレクションのなかにも見いだされるのである。にもかかわらず、リユーゼルはその同定を疑問視し、それは特定の個人というより広く民衆に帰すると考えるのが妥当であるとする。さらにロストレナンやルペルティエ師が引用したランデヴェネックの草稿についても、彼はそれが十五世紀に筆写されたものであり、その内容が五世紀のバルドに帰するとは行き過ぎだと考へる。そもそもロストレナン神父もルペルティエ師も、これほど貴重な資料が手元にありながら、それをわずか二度しか引用していないというのは奇妙ではないか⁽³⁾。

こうしてリユーゼルは、『バルザズ・ブレイス』の「グエンフランの予言」は、ルペルティエ師とロストルナンが引用した詩句や、オーウエン・ジョーンズの『ミヴィリアン』や六世紀のウェールズのバルドたちの作品を参考に創作されたものだとして推測する。十世紀以前の歌が今日まで完全な形で伝承されていることなどあり得ず、伝わっていたとしてもそれ

は諺や俚諺や詩句の断片がせいぜいだというのがリユーゼルの確信だったのである。傍証として、彼は叔父ルユエルの次のような言葉を引く。「われわれのブルターニュ地方には、ナシヨナルな歌や伝承が数多くある。しかしそれらは比較的新しい時代に作られたもので、十四世紀以前に遡るものなど私は知らない⁽⁴⁾」。

その一方で、リユーゼルは、ブルターニュには十六世紀から十八世紀にかけて作られた歌ならばたくさんあると言う。そうした歌の内容は、貴族の争いや権力の乱用や死刑執行や暴力沙汰とさまざままで、そこに描かれた風俗も十四世紀以前のものかと思えるほど野蛮だが、共通しているのはすべてが実際に起こった身近な事件であり、一般の歴史や遠方の出来事はほとんど取り上げられないことである。著者は次のようなルナンの一文を引く。「民衆の有名人が歴史上の有名人間であることは稀であり、過ぎ去った時代の風評が民衆的な経路と歴史的な経路という二つの経路を通じてわれわれのもとにやってくる時、この二つの伝承の形式が互いにきちんと一致することはほとんどない⁽⁵⁾」。

続けてリユーゼルは、ブルトン語の「クレール」という語の意味に言及し、ラヴィルマルケが「神学校の学生」とのみ解釈したこの語には、実は十八世紀末まで、「読み書きができる人」といったもうひとつの意味があり、だからこそ彼らはグウェルスでもあまり立派な人物として描かれていないのだと指摘したのち、十六世紀末から始まるブルターニュの印刷された歌の歴史に触れてこう書く。

私の子供の頃、旅回りの歌手はまだ結構たくさんいて、彼らがとくに冬の夜、袋のなかに古いグウェルスや新しいソーンや色鮮やかな美しい聖人の画がいっぱい詰まった袋を抱えてやって来るのを、皆がどんなに喜んで迎えたかを憶えている。(……) このアルモリカの小ホメロスたちも、いまでは日に日に珍しくなり、遠からず完全に姿を消してしまうか、ほとんどいなくなってしまうことだろう。すでにブルターニュの田舎で行商人が売り始めている(……) 平板でつまら

ないフランス語の歌が、こうした自然で、独特で、ナショナルでもある産物に、ブルトン人がそのすべての信仰、習俗、感情、夢、そして心を注いだあの産物に取って代わってしまうだろう⁽⁶⁾。

ブルターニユの印刷された歌について語りながら、リュージェルはこれまで最上の民謡が印刷されたことはけっしてなく、その作り手は心と意図において素朴かつ実直で、ほとんどいつも読み書きのできない正直な人間だったのだと強調する。が、その筆は昔日を回想する一方で、また彼らの対極にある現代のバルドたちにも向かい、彼らが平気で歌にフランス語を混ぜ、自分も理解できないことを書きながら、それを優れた作品だと思い込んでいると難じるのである。ともあれ、ガリアに始まったブルターニユの歌の歴史は、こうして話が「最後のバルドたち」に及んだところで幕を閉じる。

『バルザズ・ブレイス』への疑問

第二部ではいよいよ『バルザズ・ブレイス』が組上に載せられる。著者はルナンの言葉を使いながら、「二千年もまえに死んだ人」を論じるように『バルザズ・ブレイス』の著者を語るつもりだ、と自らの論述における誠実さと客観性を約束し、なぜいまそれが批判されなければならないのか、その理由を説明する。

一八三九年に『バルザズ・ブレイス』の初版が出版されたとき、民謡研究はまだ揺籃期だった。したがって、この時代にラヴィルマルケが学問的な方法を使わなかったからといって誰も彼を咎めることはできない。しかし、その後この分野ではさまざまな書物が出版され、学問的な水準も上がった。にもかかわらず、最新版でも著者がその方法を変えようとしていないのは見過ごすわけにはいかない。ラヴィルマルケは当然企図されて然るべき批評版を出版しようとしてもいないし、その理由を明らかにしようとしてもいないのだ。リュージェルが問題視するのは、『バルザズ・ブレイス』の著者における、この学

問的誠実さの欠如なのである。彼は言う。「学問は決して停滞するものでも不動のものでもない。(……) 最新の研究動向に少しでも注意を払っている人ならば、(……) 意見や視点はそうした進歩に応じて変わらねばならないし、修正されなければならぬのだ(?)」。

たしかに、ラヴィルマルケは長く斯界のただひとりの権威であった。リユーゼルはこの立場が彼の知的誠実さに及ぼした影響を指摘しつつ、続けて『バルザズ・ブレイス』最新版の「前書き」と「序文」の記述に見られる誤りを列挙する。以下、順に追おう。

ラヴィルマルケは詩人と彼が歌う出来事や人物との同時代性を強調した。が、リユーゼルによれば、これは幾つかの場合には真だが、しかし多くの例外を含む。彼は自らの歌集からその反例を引く一方で、十三世紀末の人物であるウイリアム・テルやロビン・フッドを歌った歌が現れるのは、ようやく死後一五〇年を経過してからであるという重要な事実を指摘する。

むろん、すでに述べた「蛙の晩課」も問題になる。リユーゼルは、『バルザズ・ブレイス』を作るに当たって、他の収集家から少なからぬ歌を借りたが、にもかかわらず、そこに収録された歌は他の収集家のコレクションにはそのままの形で見つけることができず、それはとくに「蛙の晩課」において著しいと言う。なにしろ、他のヴァージョンでは支離滅裂で無意味なこの歌が、『バルザズ・ブレイス』においてはドルイドの教義にまつわる問答歌になってしまっているのだから。しかもリユーゼルは、「ドルイド」にせよドルイスにせよ、そんな言葉がブルターニュの農民によって口にされるのを聴いたことがないとさえ語る。

批判の矛先はまた、ラヴィルマルケが信奉する「ウォルター・スコットの方法」にも向けられる。この方法によれば、選ぶべきは最も詳細なヴァージョンであり、詩的でない箇所はより詩的な表現に置き換えられ得る。が、リユーゼルはこ

れを批判的方法とは相容れないとし、「詩的ではない」として捨てられる節が重要な特徴を含んでいることもあるとする。ガストン・パリスの主張を紹介する。パリスによれば、年代記で異った稿本を混ぜこぜにするのが許されないように、民謡のヴァージョンを混ぜこぜにすることも許されないものであり、ラヴィルマルケの方法は、ある歌のレオン方言版をコルヌアイユ方言版よりも優美だからという理由で採用する程度の、信頼性に乏しいものなのである。

さらに著者が指摘するのは、『バルザズ・ブレイス』における聖職者批判の歌の不在である。十六世紀から十八世紀まで、民謡のなかでは聖職者が酷評され、実際その種の歌はこれまでも数多く採集されている。しかしラヴィルマルケはその歌集からこの種の歌をまるごと排除し、まるでそんな歌は存在しないと云わんばかりである。これはブルターニュの真の民衆史を作ると公言する歴史家が取べき態度ではない。

加えてリユーゼルは、ラヴィルマルケが強調した歌と歴史的事実との一致も疑問視する。たしかに『バルザズ・ブレイス』には、ブルターニュの歴史上の人物や出来事に関する歌が多くある。しかしリユーゼルは、まさにこの一致こそが歌集の真正性を疑わせるのだとして、再びガストン・パリスの批評を引く。

これは一般論として言うことができるが、どんな性質の資料であれ、それが絶対的な保証なしに提示され、まさにわれわれの知識が思った通りのもの、単純に期待通りのものであった場合には、その資料はほとんどつねに贋物なのである。(……) 一般に、真正の資料は幾つかの点でそれまでの情報を変更し、多くの場合反古にする。人は資料のなかに見いだせると思うものをそのまま見いだすことは決してないし、あまりにも期待に答えすぎているものはそれなりの理由があるのだ(8)。

要するに、ラヴィルマルケは都合のいい歌を見つけた人という話も聞かない。もちろん、それは単にラヴィルマルケが幸運だったということなのかもしれない。しかしふつう歌が消えるのに、四五〇年はかかる。一八三五、六年には残っていた二〇篇ばかりの歌が、いまは跡形もないということがあるのだろうか。しかも、故郷のトレギエはブルターニュで最も口頭伝承が豊かなところなのに。

こうしてリユーゼルは、ラヴィルマルケの手口を明らかにすべく、自分の歌集と『バルザズ・ブレイス』のそれぞれから「ロスマルシヨン」と「デュ・ゲ克蘭の代子」という相似た内容をもつ詩を引き、そのうえで、ラヴィルマルケがいかにして素朴な田舎の歌を詩的・文学的かつ愛国的な歌へと仕立て上げていったのか、その手口を推理していく。いわく、後者のきわめて詩的な歌の冒頭部分はまったく作者による創作で、前者にはゲ克蘭やロジェルソンの有名な名前がはまったりと登場せず、もちろんデュ・ゲ克蘭とロジェルソンの会見のエピソードも完全な創作で、ラヴィルマルケがデュ・ゲ克蘭をこの歌に登場させようと思いついたのは、たぶんあるヴァージョンに見える「グレスケル」という語のゆえであろう、云々。

『バルザズ・ブレイス』は贗物である

こうした手続きを経てリユーゼルが下す結論は、次のようなものである。すなわち、『バルザズ・ブレイス』は二種類の歌からなる。

第一の歌は、ラヴィルマルケによって完全に創作された歌であり、そこには歌集のなかで最も古く、歴史的・文献学的な見地から最も重要とされる歌が含まれる(9)。作者はそこに描くべき出来事や人間、当時の思想・風俗・習慣・信仰などに關して、歴史家や年代記作家、詩人や口頭伝承を頼りに、あらかじめあらゆる情報を集めた。その手際は見事ではあつ

